

おじちゃんへ

ラジオネーム：スローモーション

わたしが小さい頃、年末年始に、母方の実家に帰るのが恒例で元日になると、おじちゃんと会えた。

私の家族とおじちゃんの家族が集まって、1月1日を過ごす。

その時間がないと、新年を迎えた気がしないくらい。当たり前だと思っていた。

小さい頃の私は、おじちゃんが何者かわかっていなかったんだと思う。おじちゃんのことを、お正月に会える人・お正月にお酒を持ってくる人・お正月になぜか、うちに来る人・お年玉をくれる人・「あはあはあはあは」と豪快に笑う人って思っていた。でも、その笑顔に、どこか温かみを感じていたことを覚えている。そのおじちゃんが親戚だって、理解したころには、私がおじちゃんの笑顔が好きな理由が、分かった気がしたんだ。

大人用の席に座り、おせちとお酒を楽しむおじちゃんを子ども用の席に座っていた私は、ずっと見ていたのを覚えている。時が経ち、私の家族も、おじちゃんの家族も、忙しくなっていて、正月に会うことも少なくなっていた。

そこからだと思う、他に会う機会もあまりなく、疎遠になってしまった。

おじちゃんとおまの顔を合わせないまま、私も地元を離れ、進学・就職を迎え、めったに会えない人になってしまった。

もちろん、覚えてはいたけれど、おじちゃんの話をしたのは、母から、おじちゃんが病気で長くないかもって聞いたころだった。そして、訃報を聞き、おじちゃんが私のことを気にかけてくれていたことを知った。

あと一回で良かった。また正月に、私の家族とおじちゃんの家で集まりたかったな。おじちゃんあの笑い声、聞いていたかったな。私も20歳を過ぎたし、おじちゃんの持ってきてくれたお酒、一緒に飲みたかったな。「ありがとう」「ってちゃんと伝えられたかな。」

このご時世で、今はなかなか、地元に戻る事が出来ないけれど、状況が落ち着いて、帰ったときには、おじちゃんに挨拶に行こうと思う。

おじちゃん、ありがとう。

／ あの日にかえりたい

松任谷 由実